

いますと残念でなりません。

父に先立たれた母は、父の十三回忌をつとめ、同じ病に倒れ、私の姑の看護に十年、疲れた私に「今度は私を頼むよ」と……病はドンドン進行、ガンでないと悲しいウソを言わなければならなかった私に、二度と病名を聞きませんでした。

「子供として、してやれるのはこれまでですよ。何時も言っていた通り、三途の川まではついて行けないのだからね。この先は父さんが道案内をしてくれるから……」

さっちり目をあけて聞いていた母は、「あ、水かい」と僅かな水をゴックリと吞んで静かに目を閉じました。

母と私の戦中戦後と人生に幕が下りたのです。

魚雷を受けた第二新興丸で生還

宮城県 佐々木 嘉代子

終戦の年私は十歳でした。終戦の詔勅を正座して聞き、母が涙し、父がじっと天井をみつめる姿で戦争の終結を知った気がします。その後、「母がソ連兵が攻めてくる前に、娘たちと岸壁から身を投じます、それを見とどけてから後を追って下さい。」と父に話しているのを耳にして、戦争とは死ぬのが当然と、小さいながらも死を覚悟したものです。

でもその直後、女、子供だけの即時引揚命令が出て、着のみ着のまま、父を残し、樺太の敷香を後にしました。貨物列車に乗り込みました。真夏の太陽と夜露で辛かったのを覚えています。

やっと大泊に着き、引揚船を待ちましたが、ホームは人で溢れ、野宿して待たねばなりませんでした。私達の番がきて、第二新興丸に乗り込むことができました

た。二列に並んだ人びとは左右に別れて、左は甲板に、右は船底にと、生死の運命の別れとも知らず手を振ってそれぞれ乗り込んだのです。空腹を少々のならまごめて我慢し、やっと横になることができて、ぐっすり寝込んでいたときです。

突然、大きな音と共に船が大きく揺れ、電灯が切れ、船底はまっくら闇になりました。不安におののいていると、早く船上に登ってくるよう伝令が走り、甲板に上がるとそこは、血を流して死んだ人や、苦しんでいる人びとでいっぱいでした。

瀕死のわが子を苦しめるよりはと荒むしろにくるみ、海に投げ込み、手を合わせて号泣する母親、そんなつらい光景があちこちで繰り広げられていたのです。

横穴をあけられた船倉では、海水に浮く樽の間から手を差し出して助けを求める人、助けのロープが届かず、力尽きた人が、一人一人と海に消えていきました。それは筆では書き尽くせぬ情景であります。船は傷つき傾きながらも自力で留萌港に着いたのです。

亡くなった人の荷物から米袋を出し、風呂の水を飲んで飢えをいやし、かたわらでは死を見つめ、自分は生きるために人の物を食べ、悲しかったものです。

この時の引き揚げ船、小笠原丸・泰東丸・第二新興丸の三隻が国籍不明の潜水艦に魚雷攻撃を受け、小笠原丸は沈没、乗っていた七百余人のうち、死者六百四十八人、生存者はわずか六十二人、泰東丸も沈没、七百八十人のうち六百六十七人死亡・そして私達の乗った第二新興丸は四百人死亡と後で発表されました。

母が校庭に並べられた死体の中から町内の方々の身元の確認や縁者への連絡などのため、何日か残りご親切なお宅にお世話になったあと、留萌を立ち、母の実家仙台に辿り着いたのは、樺太を出て一か月たつてのことでした。母はこの時亡くなった知人のお名前を仏壇に上げ、いつも供養をしておりました。

戦後の食料不足の混乱の中、引揚者は親類にとって招かれざる客であった。母は樺太の豊かな生活の中から、いつも実家には尽くしていたという思いがあったのでしよう。親類の冷たさに悔し涙を流すのを何度

も見ました。

離れ座敷で数日過ごしたある日、農作業小屋に移りました。箸一本、茶碗一個もない、無からの生活が始まりました。しかし母には希望がありました。それは兄の帰還です。娘五人の中の一人息子であった兄は医学生で、学徒出陣をしていました。兄さんが帰って来ればと私達は待ちました。

でもそれは一枚の紙で全ての夢も希望も失う日でしたのです。そこには「陸軍軍医大尉蜂屋富男グアム島で玉碎」と記されておりました。母の嘆きは大きく、寝込む日が続きましたが、食べねばなりません。

樺太に残してきた父の生死もわからず、不安な日々でしたが、母は強かったです。農家の手助けなどをし、どうにか空腹をいやす日々が続きました。

役場から生活保護を受けたらと、すすめられました。母は貧しくてもお国から施しを受けるのは辞退したいと話していました。そうすることは母の自尊心が許さなかったのでしょうか。

あの時代、人びとは一様に空腹でした。でも引揚者

にはさらに生活のすべてがないのです。職も住まいも物々交換するものもない。本当に惨めでつらい日々だったのです。でもそのうち父も帰還し、世の中も落ち着いてくると共に、どうにか人並みらしい生活ができるようになりました。

両親の苦勞と努力で、我が家には戦後の復興がどこよりも早く訪れたのではないかと、今思い出しております。そんな暗いつらい時代を経てきた最後の世代の私達だからこそ、声を大にして、これからの人達に伝えていきたいのです。

現在の平和がどれだけ多くの人々の尊い犠牲のうえに立っていることかということを。

七人の子供を連れた私の恩人は今
どこに！

北海道 小柳 ヒフミ

一匹のトンボが細い棒の先に止っている。長く垂れ